〈研究ノート〉

学びを支える社会資源と主体性
―まなキキ・フォスタープランの試みから―

松　崎　良　美

1. はじめに

さまざまな教育現場において、学習者にとっての「主体性」という言葉は、重要なキーワードとして用いられている。平成29・30・31年改訂学習指導要領の総則においても「主体的・対話的で深い学び」が、ひとつの重要な概念とされている。高等教育機関におけるアドミッション・ポリシーの中で「主体性」という言葉が用いられることも多い。当たり前のように浸透し、「学び」に向き合う個々人が備え持つべきであるものとして、誰もが首肯するような態度を示したものといえるだろう。

2020年の学習指導要領の改訂に基づいて、「主体性」は成績でも評価の対象とされるようになっている。成績評価の観点別評価について、従来の「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の4観点から、「主体的に学習に取り組む態度（主体性）」「思考・判断・表現」「知識・技能」の3観点に変化したのだ。それだけ、「主体性」を持って学びに向き合い、取り組む態度が重視されるようになったということでもあり、且つ、教育を通じて、子どもたちがより「主体的」になれるような配慮が、教員の側にも求められるようになった、といえよう。しかし果たして、「主体性」とはどのように引き出し得るものなのか。

本稿では、「主体性」や「主体的」な物事への向き合い方に着目し、どのようにその“主体性”が獲得されていくのか、「主体性」や「主体的」態度を個人が獲得していく過程を、周囲の人間や環境がいかにサポートしていくことができるのか、そのヒントを探るために、子どもたちへの家庭学習支援の実践例を通じて考えていく。

2. 取り扱う実践例について

本稿で取り上げる実践例の具体的説明に入る前に、家庭学習支援を実施する主体や、その取り組みに至る経緯を紹介する。

(1) Learning Crisis研究会／学びの危機プロジェクト

家庭学習支援は、Learning Crisis研究会／学びの危機プロジェクト（以下、まなキキ）が実施するプログラムだ[1)]。もともと、まなキキは、2020年の新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、障害や事情があって学びづらさを抱えている子どもたちが置かれた状況を危惧して組織された研究会である[2)]。筆者は当研究会事務局の責任者としての立場で、以下について記述する。当研究会は、津田塾大学における障害学生支援のほか、障害があってもなくても居心地のよい学びの環境づくりを目指す研究活動やイベントの企画運営を実施してきた津田塾大学インクルーシブ教育支援室のメンバー有志によって立ち上げられた。

主に、「まなキキ・サイト」と呼ばれるウェブサイトや、「まなキキちゃんねる」というYouTubeチャンネルを通じて[3)]、学びの教材や記事を配信するほか、子どもたちだけではなく学生や地域の方々と共に、学びの危機を社会的な問題として考えていくことを目指し、研究会や文献講読会等を開催している。

まなキキは、サイトのトップページにて「『学び』たい児童・生徒たち、さらに障害があったり、事情があって学びにくい子どもたちも、『好奇心をもって自主的に学ぶこと』に役立てられる情報を、みなさんと共有できるサイト」として運営され、「サイトの情報を活用して、楽しく真剣に『学ぶ』ことに挑戦してみて」ほしいと呼びかけている。今回、着目する家庭学習支援；「まなキキ・フォスタープラン」も、「学びに対する好奇心を大切にし、よりワクワクした学びをお手伝いしていくことを目指」す一環として実施されている。

(2) 家庭学習支援の実践例としてのまなキキ・フォスタープラン

まなキキ・フォスタープランは、遠隔会議システム・ZOOM などを用いて実施される家庭学習支援を指す。家庭学習支援は、子どもたちに教える経験を積みたいと希望する大学生や大学院生らが担い手となり、彼らは「学びのナビゲーター（以下、まなナビ）」と称される。「ナビゲーター：navigator」すなわち「航海士」のような存在として、「子ども：船長：captain」の目指す「夢：目的地」まで、助言やアドバイスを通じて航路を示すような役割を持つ。家庭学習支援は、マンツーマン形式で実施される家庭教師のような形をとるが、必ず Learning Crisis 研究会の事務局が ZOOM の立ち上げや管理などのホスト役として ZOOM に裏方に加わり、サポートする体制をとる。

家庭学習支援は、2 週間に一度、60 分程度を目安に実施されるが、その時々の子どもの状態に応じて、短縮されたり、延長されることが許容されている。まなナビには、家庭学習支援一回につき決まった有償ボランティア代が御礼として支給されるが、その運営資金は、主に、プロジェクトの趣旨に賛同していただいた寄付などから工面される。

(2) –1. 学びのナビゲーター

まなナビは、現在、複数の大学に所属する大学生・大学院生たちを中心に構成されている。プロジェクトへの参加希望は、まなキキ・サイトで受付けるが、希望があってから直ちに家庭学習支援を担当してもらうことには至らない。実際の家庭学習支援に入る前に、プロジェクトに参加する大学生・大学院生は研修を受講し、家庭学習支援時の配慮事項やポイントについて実習を通じて整理する機会を持つ。特に、実際のまなキキの教材にあたる記事や映像の制作に挑戦してもらうことで、「伝えるべきポイント」をどのような文脈で整理し、どこまでの深さをもって提供しうるか検討してもらう。また、「暗記すべきこと」として、学びの単元を紹介するのではなく、「なぜ、そのようになるのか」という論理を最低限示すことを意識してもらっている。

研修はオンデマンド形式で課題が配布され、約 3 週間を目途に取り組んでもらう想定で用意されている。課題に回答する過程で質問や疑問点があった場合は、事務局担当者とのやりとりを通じて確認ができるような体制をとる。最終課題となる記事や映像制作が最も時間的・作業的負担を要するものとなっており、事務局と綿密に打ち合わせながら作業を遂行していくこととなる。

実際に家庭学習支援に参加してもらってからも、家庭学習支援の前後に事務局と必要事項を打ち合わせるほか、家庭学習支援の実践を振り返り、よりよい内容の提供を果たすことができるよう、フィードバックを通じて検討を実施する。まなナビは、「教える経験を積みたい」など、積極的に「学び」に関わる機会を持ちたいと考えている存在であるが、実際の「教える」経験そのものには個人差がある。小学生や中学生などの年代の子どもたちと接する経験をほぼ持ったことがない人もいる。塾や家庭教師などのアルバイト経験がある場合も、一般の塾や家庭教師が目指す「勉強」の仕方と、まなキキが目指すスタイルが必ずしも合致しないこともあり、その意味で、「専門家」ではない立場として家庭学習支援に携わる。

(2) –2. まなキキ・フォスタープランに参加する子どもたち

まなキキ・サイト上の応募フォームを経て参加の申し込みをした子どもたちが、まなキキ・フォスタープランに参加している。家庭学習支援に入る前に、Learning Crisis 研究会の事務局で、保護者と子どもと ZOOM 上でヒアリングを実施し、事前にどのような「学びづらさ」を抱えていて、どのような夢や希望を持っているのか確認する機会を持つ。事務局からは、学びの危機プロジェクトの代表と教科担当者が参加して行う。

本プロジェクトについては、2022 年 1 月に朝日新聞で紹介され[4]、その記事を見て申し込みをするケースが圧倒的であったが、その後も五月雨式に参加申し込みが続いており、インターネットの検索結果などを通じて、プロジェクトの存在を知り、申し込みに至っていることが伺われる。

ヒアリング後は、順番に家庭学習支援の開始の調整を行う。特に、ヒアリング時の話を受けて、まなナビとのマッチングを事務局で実施し、家庭学習支援の開始前に、保護者と子ども、Learning Crisis研究会事務局とまなナビで顔合わせの機会を持ち、両者の挨拶や相性などを見たうえで開始される。

また、家庭学習支援は、研究プロジェクトとしての側面を持つことを、保護者と子どもに説明文書を郵送のうえ説明をし、研究プロジェクトへの参加の同意を得たうえで実施に至る。

(2)–3. Learning Crisis 研究会事務局

家庭学習支援の開催が決定してからは、事務局は、事務的支援と実際的支援に務める。事務的支援においては、家庭学習支援を実施する際に必要となる教材等の資料の発送作業がある。事務局は、家庭学習支援を実施する ZOOM を立ち上げ、ホスト役として管理し、安全管理およびデータ分析を目的としたレコーディングを行う。また、家庭学習支援実施中のトラブル等があった場合の緊急連絡先としても機能する。

家庭学習支援が円滑に進行すること、また質を高めていくことを目的として、家庭学習支援の実際的支援が実施される。家庭学習支援の実施中、子どもたちが「学び」から関心が逸れそうなときに、チャットなどを通じて声掛けを行ったり、まなナビの進行に役立つような情報提供等の支援を行う。

さらに、まなナビが、家庭学習支援を実施する前に提出する家庭学習支援計画、家庭学習支援実施後に提出する家庭学習支援報告に基づいて、家庭学習支援のフィードバックを実施する。その日ごとの子どもたちの様子や状態などの印象を、第三者的な視点としてまなナビにフィードバックする。また、子どもの状態や反応を通じて、家庭学習支援の進め方や、関わり方など、気が付いた点や改善すべきと思われる点を還元する。

(3) 現在のまなキキ・フォスタープランの運用状況

2022 年 8 月末の時点で 60 件弱の家庭からの参加申し込みがあった。筆者は主に国語科の家庭学習支援の希望者とのヒアリングやマッチングに関わっていたため、以下では国語科におけるまなキキ・フォスタープランの現況について述べる。

2022 年 5 月以降から 8 月末までで国語科のまなキキ・フォスタープランのマッチングが成立したのは 6 ケースとなり、各ケースが、おおよそ月 1-2 回の頻度で家庭学習支援を実施した。家庭学習支援を開催した延べ数は、40 回となる。いずれも、ZOOM を用いた家庭学習支援で、子どもたちは各家庭から、まなナビは各自の自宅などから ZOOM にアクセスし、事務局はいずれもその ZOOM 管理者・ホスト役として参加している。

3. 目的

まなキキ・フォスタープランにおける家庭学習支援の実践から、「主体性」と「主体性」を支援する関わり方や環境を含む要件について検討していく。特に注目する観点として、主体性を獲得していく当事者として「子どもたち」と「学びのナビゲーター」、主体性獲得のプロセスに関与する存在として「学びのナビゲーター」と「Learning Crisis 研究会・事務局」を挙げる。本稿では、「子どもたち」、「学びのナビゲーター」、「Learning Crisis 研究会・事務局」が、4 か月余りの期間、家庭学習支援の実践の場においてそれぞれどのように振る舞い、どのような反応をみせてきたのかを整理し、「主体性」と「主体性の獲得」を支える要件を検討するうえでのヒントを探る。

4. 結果

(1) 対象事例について

まなキキ・フォスタープランに参加している子どもたちは、いずれも障害や事情があって学びづらさを抱えている。その「学びづらさ」の実感は、子どもたちじしんが自覚している場合もあれば、保護者の印象として抱かれている場合もあった。本稿で着目した 6 ケースすべてで、発達障害に由来する課題が保護者によって言及されていた。うち 1 ケースは難病当事者であった。「勉強」に対する苦手意識や忌避的な反応が見られることを憂慮して、「藁にもすがる思い」

表 1. 国語科まなキキ・フォスタープランの参加ケース一覧

Case（開始日）	家庭学習支援に参加する子ども		学びのナビゲーター
	学年	概要	
Case 1.（2022/5/11）	小 3	鉄棒が大好きな女の子。特別支援級に取り出しで通う。仲良し姉妹の妹で姉（新・小 5）と共に家庭学習支援に参加。将来の夢は、妹はペットトリマー、姉は保育士さん	A さん
Case 2.（2022/4/28）	小 5	作家志望の女の子。物語を読むのも作るのも好きだが、少し漢字が苦手でもっといろいろな言葉を覚えて語彙を増やしていきたいと考えている。	B さん
Case 3.（2022/5/9）	幼稚園年長	コロナ下、難病のためなかなか登園がかなわない。図鑑をみたり文字を覚えるのが大好きな好奇心旺盛な男の子。月 1 回程度の頻度で実施している。	C さん
Case 4.（2022/5/11）	中 1	将来の夢は弁護士さん。コミュニケーション上の懸念から特別支援学級に進学。ゲーム（マインクラフト）も大好きなお兄ちゃんで妹さんと一緒に家庭学習支援に参加。	B さん
Case 5.（2022/5/6）	小 5	おしゃべりが好きな男の子。将来はディズニーランドで働きたい。学校のペースが合わず、あまり登校できていない。ついついゲームに熱中しがちなので、少しずつ学んでいきたい。	D さん
Case 6.（2022/6/2）	小 5	両親の仕事の都合で海外の小学校に通う男の子。英語や国語に少し苦手意識がある。マンガが大好き。ゴルフやテニス、空手などスポーツなどの習い事も頑張っている。	E さん

でまなキキ・フォスタープランに応募したと保護者が話すケースも数例みられた。保護者には、あらかじめ、まなキキ・フォスタープランは療育的な目的をもって行われるものではなく、実施主体者は心理や医療に関わる「専門家」ではない旨を説明している。まなナビには、保護者から申告があった診断名や症状等についてすべて開示せず、参加する子どもの得意や不得意、困っていることなど、家庭学習支援を実施していくうえで必要最低限と思われる情報について共有している（表 1）。

子どもたちの先生役として携わるまなナビは、主に大学 1 年生から大学 4 年生の学生である。本稿で取り扱う事例に関わるまなナビはすべて女性であった。

（2）家庭学習支援中の子どもたちと学びのナビゲーター

ほとんどの子どもたちが ZOOM の扱い方などについて慣れた様子を見せていた。Case 3. の未就学児のケースについては、保護者が近くで見守り、機器類を取り扱っていた。子どもの目線がカメラのついた端末から逸れてしまうこともあったが、回数を重ねる中で、まなナビと子どもの視線が画面を通じて合っていくような経過が認められた。

家庭学習支援は、いずれのケースも雑談など、子どもたちとのコミュニケーションを通じたアイスブレイクから始まることが多かった。まなナビによって、緊張感の持ち方は異なるが、基本的には笑顔が向けられていた。雑談では、子どもたちの最近の学校の様子や楽しかったことを尋ねるほか、勉強で困ったところや難しかったところはなかったか、などの確認が主な内容を占めた。

まなナビは、子どもたちの発言に対して理解や共感を示すようなジェスチャを多く取り入れており、子どもたちが話した「苦手」や「困りごと」について、じしんの経験も交えて回答をしていた。「それ、難しいよね」、「私も苦手だったなあ」などのように伝えることで、子どもたちの表情も少しずつ和らいでいるようであった。

また、画面上で確認できた点を話題に取り上げて雑談を膨らませているようなこともあった。

さりげなく、描いたイラストをカメラ越しに見せている子どもに対して、「あ！それってもしかしてパンのイラスト？すごい！上手だね！絵を描くのが好きなの？」などとまなナビが応答すると、嬉しそうに「大好き！」と返事をするような場面もあった。子どもの家庭で飼っている猫が画面をすれ違ったときに、猫の話題を取り入れたり、子どもが着ている洋服にプリントされたキャラクターや、髪型が変わったことについて触れることもあった。

子どもたちは、自分じしんの姿を画面に映す代わりに、ぬいぐるみなどを登場させて、まなナビとやりとりするようなこともあった。その際、まなナビは、ぬいぐるみと「あれ？○○ちゃんはどこに行っちゃったのかな？」などと会話を続け、本人が画面上に不在であることを咎めず、そのままやりとりを続けていた。たいていの場合、子どもたちは自然と画面に復帰していた。

子どもたちは、画面の前にずっと同じ姿勢で居続けないことも多かった。ベッドの上から家庭学習支援に参加しているときは、ごろんと寝転んでみたり、自由な体勢で参加していた。姿勢や恰好について、危険がありそうな場面以外は、まなナビからの言及はほぼされていない。ただし、顔の表情が確認できるかどうか、という点については気を遣っており、姿が見えなくなったとき、「顔が見れなくてさみしいな」などと伝えながら、画面への復帰を促していた。また、まなナビに見てほしいものがあったときにその対象を取りに行ったり、トイレや水分補給で席をたつことも時折見られたが、まなナビが放置されることは一度もなく、家庭学習支援が開催されている間の対話はずっと成立していた。

家庭学習支援の時間は、多くの場合だいたい60分程度で終了していたが、子どもがZOOMからの退室を拒み、10分程度の延長がある場合もあった。子どもたちが、まなナビに質問をしたり、終了しそうになると話題を変えるなどして、まなナビとの会話を楽しんでいる様子が伺われた。

(3) 家庭学習支援における「学び」

家庭学習支援では、学校の宿題や勉強で分からなかった部分に関する質問等を受け付けるほか、まなキキ側で準備した教材に取り組む形で進められた。まなキキ側で準備している教材の中には、「まなキキちゃんねる」で公開している番組の一つである「みんなで学ぼう！漢字ちゃん」[5]をベースにしたものが挙げられる。これは、漢字がどのようなパーツの組み合わせでできているのかを料理番組になぞらえて説明することを目指した動画教材である。動画は、事前に送付した教材と組み合わせて利用されていた。

事務局で送付した教材をベースに、子どもとのやりとりを受けて、発展的な取り組みを行っているまなナビもいた。子どもから「『くさかんむり』のある漢字を出しっこしよう」という提案がされ、お互いに漢字を出した後で、まなナビから「二人で出し合った漢字を使って、物語を作ってみよう」と促していた。子どもとまなナビが一文ずつ順に文章を考えていくことで、協力して物語づくりを楽しむ様子が見られた。

国語という教科をベースに家庭学習支援は実施されているが、子どもとのやりとりを受けて、思わぬ方向に話題が展開していくこともあった。「鳥」という漢字をまなナビが解説していたときに、「島」という漢字と似ているという気づきが子どもから挙げられることがあった。「島」という漢字の語源は、「鳥が止まる所」であって、鳥が止まる海上の山を示した図形であることを家庭学習支援中に一緒に確認をし、その話題を受ける形でまなナビから、渡り鳥や、島の中には海底火山などの噴火を通じて海底が隆起して生まれたものもあること、海の底は平らではなく地上と同様に山や谷があること、ハワイ諸島も海底火山の活動をきっかけに生まれたもので、ハワイには多様な種の鳥が棲息していることが紹介されたことがあった。ある漢字を学ぶという切り口から、国語だけではなく、社会科や理科的な内容に派生していくことや、学年別の学習目安にとらわれない展開が見て取れた。

他に、子どもたちの様子や好み、興味関心など、雑談を通じて聞き取った情報を基にして、まなナビが子どもたちに合わせて教材を作成することもあった。時間の計算が苦手な子どもに対して、時計の模型を一緒に手作りするところから始めて、その自作の時計を使って時間の計算

を試みることに取り組んだ例もあった。時計の模型づくりに必要な材料は事前に事務局から家庭に送付して実施された。子どもたちは数回の家庭学習支援を通じて時計を完成させていた。時計作りのプロセスでは、コンパスや分度器の使い方、角度や円の特徴を説明する機会も含まれていた。

(4) 家庭学習支援を通じた子どもたちの変化

家庭学習支援が始まった当初、まなナビの問いかけに対する子どもたちの回答は「うん」や「ううん」などのシンプルなものが中心だったが、回数を重ねるごとに、まなナビが問いかけるまでもなく、自ら最近の学校の様子や楽しかったことなどを嬉しそうに報告してくれるようになった。中には、バク転やブリッジ、逆立ちなど、できるようになった身体的「技」を披露してくれることがあった。

家庭学習支援を運営していくうえで欠かせないツールの一つであるZOOMをどんどん活用していく様子もみられた。ZOOMの背景を、子どもとまなナビがおそろいに換えて家庭学習支援を実施することもあった。ZOOMの機能の一つである「リアクション」も、子どもたちが自ら発見して活用していくことがあった。チャット機能で反応を言葉や絵文字で示すようなこともあった。

家庭学習支援中、なるべく「勉強」を遠ざけたいような行動をとる子どももいた。子どもじしんが「本当の気持ち」として、手元にある紙などを使って、「いやだなあ」などと書きつけて、カメラ越しにまなナビに示し、口頭で「本当はこういう気持ち」などと表現するようなことも見られた。まなナビは、そうした子どもの気持ちを否定せず、「そうかあ。どうしようかなあ」などと言いながら、巧みに話題を逸らし、学びに結びつけるような「雑談」を展開していこうとする工夫が見られたこともあった。無理やり勉強につなげたり、叱るというような行動を取ることはなく、回数を重ねていくうちに、その子どもじしんから「今度は漢字の勉強をしよう」と提案がされるようにもなった。

ぬいぐるみに自分の発言を代弁させていたような子どもも、回数を重ねるごとに、送付した教材を画面越しに示して、雑談から学習に入っていくきっかけを作ろうとしている様子が認められることもあった。また、「実は、ここがよくわからない」などといった相談が子どもの側から発せられることも、複数のケースで確認された。

(5) 事務局・ホスト役のかかわり

家庭学習支援中、事務局はZOOMのホスト役として同じ画面上に存在しているが、ビデオオフ、ミュートの状態で関わり、基本的に、場面はまなナビと子どもたちのかかわりで展開されていた。しかし、事務局は終始無言でいるわけではなく、チャット機能を使って挨拶をしたり、まなナビと子どものやりとりに参加することが多く見られた。

家庭学習支援中のまなナビの実践について、「いい調子」、「すごくよい感じです」などの言葉を、まなナビ宛てにダイレクトメッセージを送ることもあれば、家庭学習支援で話題の脱線度合いが強まった際に、「そういえば、○○はどうなんだろう？」などのメッセージで軌道修正を促すこともあった。

子どもが、まなナビの発言を遮って自分の発言を何度も繰り返すようなことも見られたが、家庭学習支援終了後に、「まなナビと子どもの、二人のルールを作って共有してみたらどうか」などと提案をすることもあった。まなナビの実践に、不安要素がみられた際には、家庭学習支援終了後に感じられた点を共有し、代替案を示しながら、次回以降の実践にどうつなげていくとよさそうか相談する機会を持つこともあった。

沈黙がつづくなど、まなナビが話題の切り替えや展開に躊躇しているように見受けられた際は、話題の呼び水となるような発言をチャットでしてみたり、まなナビが子どもが示した反応を見落としているような場合は、チャットで応答したり、まなナビにダイレクトメッセージで言及することもあった。

ホスト役は、まなナビが示した話題をより深めていけるよう話題に介入することがあり、「学び」の話題を拡げたり、深めていくための伏線を張っていくような工夫も実施していた。

5. 考察・まとめ

まなキキ・フォスタープランにおける家庭学習支援の実践は、まだ4か月にも満たず、今後の展開も含めて注視していかねばならない点は多い。しかしながら、子どもたちとまなナビの関係性は非常に良好で、相手への関心が途切れることなく、コミュニケーションが家庭学習支援の時間中ずっと成立していたことは特徴的であったように思われる。自らが利用する端末のスイッチを切ってしまったり、まなナビからの呼びかけに応答せずに画面から姿を消してしまうなど、子どもたちが、自ら家庭学習支援を中断させてしまえることは容易にできたはずだが、そのような展開に至ることは一例もなく、60分近くの時間、オンラインでのやりとりが成立していた。また、回数を重ねるごとに子どもたちの側から、近況やじしんの気持ちを伝えることが増え、まなナビに「褒めてほしい」という気持ちから、できるようになったことや成果物を示すようになっていた。また、学習に取り組む準備ができていることが、言葉や態度で示されるようになり、まなナビとZOOMでやりとりする時間が、「学び」を実践する場であることが子どもたちじしんに明確に認識され、定着していることが伺われた。

まなナビの子どもたちへの関わりかたは、非常に自由で柔軟性のあるものであったことも特徴として指摘できるだろう。「こうあるべき」という前提がなく、最低限、「子どもの表情をみながらやりとりが成立すること」のみが重視され、その実現のための工夫や配慮がされていた。子どもたちへの呼びかけ方や話題の拡げ方、子どもの発言に対する反応の仕方や表情など、子どもたちが安心して自己開示できるような工夫が、自然に実践されていた。関心や興味そのものが大切に扱われ、「やらねばならない」課題をこなすような時間としては過ごされていなかった。それぞれの子どもが喜んでくれるとよいという願いから教材が独自に作成されたり、話題が用意され、準備したものが、予定どおりに終わらなくても、時間をかけて進めていくことが許容されていた。

子どもたちは、まなキキ・フォスタープランを通じて、自分だけに注目して、話をし、自分の話を聞いてくれる存在と出会い、その人と定期的に関係性を続けていく機会を持つことになったともいえる。その関係性は、まなナビが何かを一方的に教えたり、作業させるといった一方向的なものではなく、共同作業的な側面を強く持っていた。一緒に何かを作っていくような共同性も特徴の一つとして指摘できるだろう。

子どもたちとまなナビの関係性が良好に築かれ、子どもたちが自ら積極的にかかわることができている背景には、まなキキ・フォスタープランが、型に捉われない柔軟性や、子どもとまなナビが一緒に関わり合いながら「学び」の時間を構築していく共同性を備えた社会資源として機能していたことが挙げられるのではないか。以上のような観点を考慮に入れながら、今後も家庭学習支援の実践を続け、主体性や主体的態度を促す社会資源のあり方の検討に努めたい。

註

1) 「まなキキ・フォスタープラン」https://learningcrisis.net/?page_id=20441
電通育英会助成事業、津田塾大学研究ブランディング事業（社会的インクルージョン基盤）、太陽生命助成、公益財団法人　博報堂教育財団による第17回児童教育実践についての研究助成などの助成を受けて展開されている。

2) 「まなキキ」https://learningcrisis.net/

3) 「まなキキちゃんねる」https://www.youtube.com/channel/UCMvc0Fm4QRkJDAWeuAKJMow

4) 朝日新聞デジタル「障害ある子どもにオンライン家庭教師を　津田塾大プロジェクトがCF」（2022年1月26日）https://www.asahi.com/articles/ASQ1T73HPQ1DUTIL030.html

5) 「みんなで学ぼう！漢字ちゃん」
https://www.youtube.com/watch?v=hCXZwTjfTuo&list=PL26V_K_1fBEyuiGX8Rbvd97pavs2kZNfI

（松崎良美・本研究所OG、Learning Crisis研究会事務局長、東洋大学社会学部社会学科助教）